

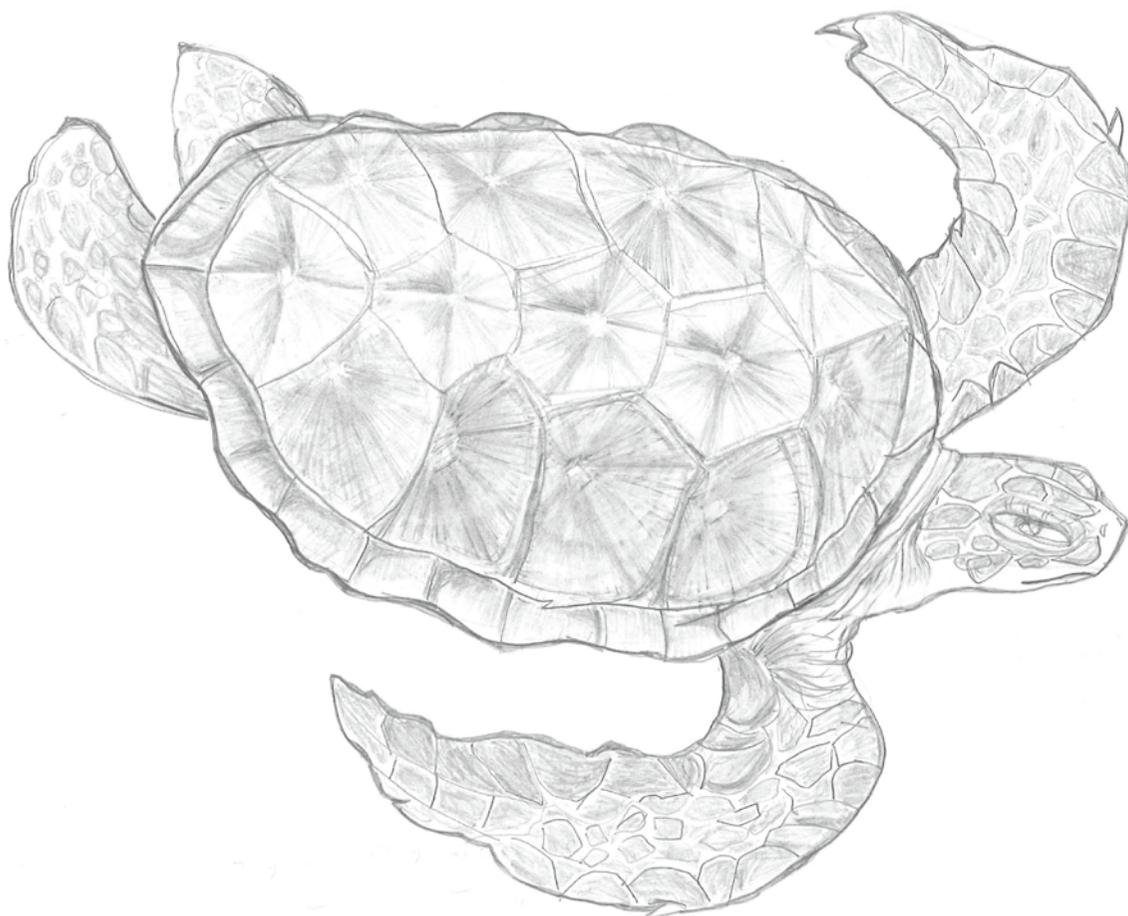


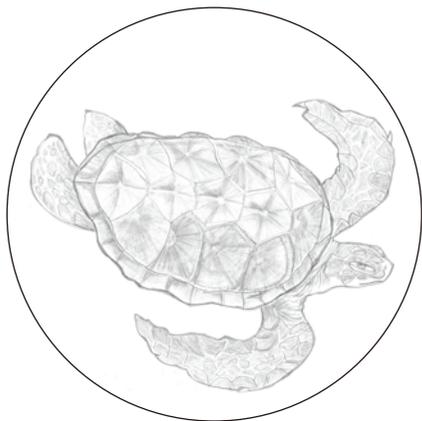
マリンタートル

Marine Turtler

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌

第19号





表紙の絵

じむら みさえ

治村 美佐恵様

今号の表紙の絵は大阪府にお住まいの治村美佐恵様のイラストです。須磨海浜水族園の「うみがめタッチ」のコーナーで一仕事を終えたアオウミガメが元のプールに帰るまでしばらくの間ほっておかれ「今日もたくさんのお友達に撫でてもらった。もっと僕たちのことをかわいがってね。夏もプールですーいすーい。」と独り言をつぶやいているところの絵です。素敵なイラストをありがとうございました。

表紙の絵を募集しています！

皆様から表紙の絵を大募集しています。可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方は、ぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

- サイズ：B5
- 色：自由。(仕上がりはモノクロになります。)
- 期限：×切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、お早めをお願いします。
- 応募方法：大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。
- 送付先：〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
日本ウミガメ協議会 マリントートルー編集部
※メールの場合は info@umigame.org まで
件名に「マリントートルー表紙」と明記の上お送り下さい。

会報の名称マリントートルー(Marine Turtler)は、英和辞書には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きの人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリントートルーと呼ぶことを提唱したいと思います。

Marine
Turtler

Contents

うみがめニュースレターのご案内

退任のご挨拶 亀崎 直樹	3P
会長就任のご挨拶 松沢 慶将	4P
ウミガメ基礎講座18	5P
「これぞホンモノの腹黒いカメ」 岡本 慶	
マリンタートラー列伝	6P
「照屋秀司さん」 若月 元樹	
ウミガメの民俗13	7P
静岡県伊東市のウミガメの墓 藤井 弘章	
第24回日本ウミガメ会議 牧之原会議を終えて 石原 孝・植月 茉莉亜	9P
第25回日本ウミガメ会議(奄美大島会議)のご案内	10P
近況報告(黒島研究所・室戸基地・奄美大島・紀宝町ウミガメ公園)	11P
悠ちゃんプロジェクト 人工ヒレ完成報告	13P
新人自己紹介	15P
事務局の主な動き	16P
平成24年度収支計算書	17P
ご寄付を頂いた方々&うみがめニュースレター & Seaturtle goods shop	18P
STSmembers募集中! & STSmembers更新手続きについて	
編集後記	

1990年に日本ウミガメ協議会を設立してから4半世紀にわたり会長を続けてきましたが、2014年の1月末をもって退任いたしました。長きにわたり、日本中、いや世界中の皆様から暖かいご支援を受けながら、ここまで活動ができたことは、私にとりましては貴重な経験でもあり財産ともなりました。ここに御礼申し上げます。

さて、ウミガメ協議会に関わる記憶を思い出すと、やはり一番最初によみがえるのは初めての鹿児島会議でした。カネテツデリカフーズ株式会社から寄付金を得て、動き回る予算ができてから、当時、小笠原海洋センターにいた菅沼弘行さんと一緒に宮崎や鹿児島を回り、竹下完さんや中島義人さんなど宮崎野生動物研究会の皆さんにお会いし、鹿児島の長崎鼻におられた鮫島正道さんを訪ね、さらには104で電話番号を調べ、ウミガメの活動をやっている人の集まる会を開こうと呼びかけたのでした。

そして、記念すべき第1回日本ウミガメ会議が1990年11月23-24日、鹿児島の敬天閣で開催されたのでした。会議のおもな目的は甲羅の長さの測り方の統一と、標識の統一でした。動物の大きさを測り、個体識別をすることは生物学の基礎ですが、その方法を統一したのでした。それにしても、会期の2日間は実に熱気がありました。昼も夜もウミガメの話をつづけ、参加者各人が謎の動物、ウミガメの実像を頭の中に築いていったのでした。

この会議は最初4年に1度の腹積もりでいたのですが、毎年やろうという話になり、それ以降、毎年秋にウミガメに興味がある人間が集まるようになったのでした。

会議の性格が変化し始めたきっかけは、会議を主催している日本ウミガメ協議会をNPO法人にしてからです。1999年、当時初代の事務局長になった通事太一郎さんは、大阪府庁に何度も足を運び、苦勞をして法人格を取得しました。何しろ、申請する我々も、さらにそれを受け付ける大阪府も初めてのNPO法人格ということで、順調にはいかなかったことが強く記憶に残っています。

NPO法人になってからは、私も少しは法人らしく振舞える団体になろうと腹をきめて動きました。基本的には資金繰りと人材確保に労力を割いてきた記憶があります。資金については、環境省のモニタリング1000の委託事業、三井物産環境基金からの助成金、さらにはいくつかの助成団体より助成金をいただき、また、カネテツデリカフーズ、ステラケミファ、ライオン、キュリネールなどの民間会社にも伝手をたよって出向き、資金の獲得や協力をお願いして回りました。ただ、ここで大きな問題は助成金や委託事業を実施するには人材が必要となり、人材を確保すると経費が膨らむというジレンマでした。それでも、ウミガメ協議会がラッキーだったのは、私が東京大学大学院の客員教授(途中までは准教授)を兼務しており、大学院生が仕事を研究の一貫として手伝ってくれたことでした。岩本太志、石原孝、森恵理香、岡本慶、島田貴裕、大内裕貴、優谷真理、上野真太郎は当会の活動の質的な向上に貢献してくれました。

年1回開催する日本ウミガメ会議も順調に開催してきました。ただし、法人格をとるまでは派手さを控えより本質的な会議を目指していたのですが、法人格を取得し、また、参加者が増加するとそれなりの体裁を整える必要性も生じてきました。さらに、会議の維持費の一部を地元にも負担してもらうようになったことも、会議が一般化していった原因かもしれません。しかし、それでもより本質的な議論を追求する姿勢を堅持しようと思いました。

しかし、法人格をとると様々なことがらを理事会で諮る必要ができました。私はウミガメ協議会の理事の面々は、それなりに古くからの知り合いで、信頼のある人々で構成されてきたので、形式的な部分を早め

に片づけて、ウミガメの研究や保護についての方向性を考える議論を理事会ですべきだと考えていました。つまり、理事会などは形式的に行い、ウミガメの保護の技術論や学問を語り合うべきだとおもっていました。ところが、理事会の雰囲気は徐々に変化し始めます。通り一辺倒の事業報告が行われ、会計の報告が行われるようになり、それだけで理事会の時間は費やされるようになりました。また、規約を吟味する理事が現れ、規約の様々な問題を指摘されるようになり、その対応に時間をとられるようになってしまいました。そもそも、私は理不尽なことには逆らって生きてきた人間でした。この形式的な流れの中で、私の存在する場はないと悟り、辞めることを決意いたしました。ただ、今後とも一人のウミガメ屋としては残りの人生を滑空していきたいと考えています。よろしくお願いいたします。

会長就任のご挨拶

松沢 慶将

今年の1月末をもって勇退された亀崎前会長の後任として、理事会によって会長に選任され、就任いたしました松沢です。遅くなりましたが、就任にあたり皆様方に謹んでご挨拶申し上げます。

当会は、1990年に全国のウミガメ関係者のネットワークとして発足して以来、「日本ウミガメ会議」の開催、全国の上陸産卵情報のとりまとめ、全国統一標識放流プログラムの実施、専門誌「うみがめニュースレター」の発行支援などを柱とした様々な活動を展開し、日本のウミガメの全容を徐々に明らかにするに至りました。もちろん、これは各地でウミガメに直接向き合う方々がいらしたからこそではありますが、携帯電話もインターネットもない時代に、考え方も立場も異なる個性的な多くの方々の賛同を得てそのお力を結集できたことについては、ひとえに、亀崎前会長の強い情熱と深い洞察、広い視野ときめ細やかな心配り、尽きることのないアイデアと実行力、ひとを惹きつけて止まないカリスマ性と力強いリーダーシップがあつての賜です。長きにわたりボランティアで当会を牽引されてきたその偉大な足跡を振り返り、改めて敬意を表するとともに、日本のウミガメ関係者を代表して、厚く感謝の意を表したく思います。

人一倍不器用な私は、会務を引き継ぐにあたり、その責任の重さに身の引き締まる思いですが、「全国各地でウミガメの保護や調査研究に取り組む個人や団体の間の情報交換を円滑に行うための媒体となり、これまで各地域レベルで考えられてきたウミガメ類の保護や研究を、日本全体に視野を広げて考えていく場を提供していく」という設立の理念を遵守し、これまで培ってきた経験と亀崎前会長から受けた薫陶と皆様方からのご声援を心の支えに、ウミガメととりまく自然環境の健全な未来に向けて、そして、信頼される組織運営に、全身全霊取り組む所存です。至らない点が多く、度々ご迷惑をおかけするかと存じますが、今後とも変わらぬご支援ご厚情を賜りたく、お願い申し上げますとともに、皆様方のご多幸を祈り、私の就任の挨拶にかえさせていただきたく思います。

「これぞホンモノの腹黒いカメ」

兵庫県立大学 自然・環境科学研究所 客員研究員 岡本 慶

「腹黒い」という言葉を聞くと、「なにかをたくらんでいるような」といったイメージが頭に浮かぶことでしょう。実は、ウミガメの世界にも「腹黒い」ものがあります。ただし、決して悪だくみをもっているわけではなく（持っているかもしれませんが）、本当に腹が黒いのです（写真参照）。

このウミガメ、本誌の読者のみなさんの中には腹黒いと聞いてピンと来た方も多くいらっしゃると思いますが、日本語でクロウミガメ、英語でblack turtleと呼ばれ、名実ともに「黒い」カメなのです。クロウミガメが学術的に世界で初めて知られたのは1868年のことです。中米グアテマラの太平洋岸で得られた個体が、アオウミガメによく似ているものの、異なっていると考えられ、Marie F. Bocourt女史によって独立した種*Chelonia agassizii*として紹介されました。その後、アオウミガメとの違いはほとんどないから同種だ、いやどう見ても違うから別種だ、という議論があちこちで起こりました。その議論に決着をつけるべく、DNAや頭骨が調べられ、現在は1995年に当会元会長の亀崎直樹の研究によって与えられたアオウミガメの亜種（同じ種でも、異なる特徴を持ち、異なる場所に生息するもの同士のことを区別して亜種と呼ぶ）という地位に落ち着いています。

しかし、亜種という地位をクロウミガメに与えてもいいものかというのは議論の残るところです。なぜなら、亜種の本来的な定義からすれば、クロウミガメには適用できないからです。どういうことでしょうか。まず、アオウミガメは大西洋、インド洋、太平洋に、クロウミガメはゾウガメで有名なガラパゴス諸島や中米の西海岸を中心とする東太平洋に主に生息しています。異なる場所に生息しているものを亜種と呼ぶからには、アオウミガメは東太平洋には生息しておらず、逆にクロウミガメは東太平洋に限って生息していることとなります。しかし、現実には、東太平洋にもアオウミガメが生息しており、西太平洋にあたるここ日本にもクロウミガメが生息しているのです。クロウミガメを亜種とするのは、少し無理があることがおわかりいただけるかと思います。

さて、このクロウミガメが日本で初めて確認された

のは、今から遡ること16年、1998年の4月30日のことでした。ウミガメ漁をされていた比嘉正宗さんによって沖縄県の西表島で捕獲され、当時八重山海中公園研究所（現黒島研究所）にいらした南知多ビーチランドの黒柳賢治さんと亀崎がクロウミガメであることを確認しました。その後は、日本各地からウミガメ情報をお寄せ下さる皆様のおかげで、これまでに30を超す発見例が蓄積されており、兵庫県神戸市の須磨海浜水族園、愛知県美浜町の南知多ビーチランド、徳島県美波町の日和佐うみがめ博物館、沖縄県本部町の沖縄美ら海水族館でその姿を見ることができます（2014年5月4日現在）。

なお、最近の研究により、日本で発見されるクロウミガメは同じ日本に生息するアオウミガメと比較して、色だけでなく、背中側の甲羅の形が明らかに異なることが、はっきりと示されました。これによって、またしても「腹黒いカメ」の地位をめぐる議論が再燃することでしょう。クロウミガメとアオウミガメは別種なのか同種なのか、一刻も早いその議論の決着を待ちたいところです。

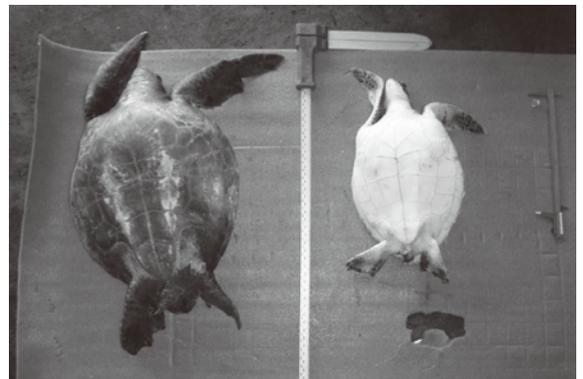


写真. 日本で発見されたアオウミガメとクロウミガメの腹側。左がクロウミガメ、右がアオウミガメ。

「照屋秀司さん」

若月 元樹

沖縄美ら海水族館の照屋秀司さんをご紹介します。照屋さんはコザ市（現・沖縄市）の出身で、コザ高校時代は本気で甲子園を目指す球児でした。当時は復帰前で、沖縄代表は今のよう甲子園に出られませんでした。が、照屋さんの時代に夏の甲子園が50回の記念大会で沖縄からも1校出られることになり、コザ高校を含む有力校は練習に励みました。

ある日、照屋さんが練習に向かおうと家を出ると街のあちらこちらから黒煙が上がっていました。沖縄の人々の米軍への怒りが爆発し、米軍の車両を次々と焼き討ちにした「コザ暴動」が発生したのです。甲子園を目指す球児にはそんな事件よりも練習です。しかし、その日を境に監督が来なくなりました。球児らと甲子園を目指して練習に燃えるべき所を「コザ暴動」に加わり、米軍の車を燃やして捕まっていたのです。監督を失ったチームが勝ち進めるわけもなく、照屋さんの最後の夏は一回戦敗退で終わったのです。

琉球大学時代には瀬底島でクマノミの研究をし、一度本土へ出たあと沖縄海洋博覧会の時にできた水族館（現在の美ら海水族館）に就職、ウミガメ担当となりマリンタートル人生が始まりました。

そんな照屋さんの所へ学生時代の私はせっせと通っていました。いつしか水族館でバイトをするようにもなりました。照屋さんから「新しく出来たウミガメ館で産卵の徴候が見られるから、来ないか」と呼ばれ、夜通し水族館の屋上からウミガメプールを双眼鏡で監視し、上陸したら照屋さんの自宅に電話をするという任務が与えられました。何日徹夜するのだろうかという不安もありました。しかし、さすがは照屋さん、初日の夜にウミガメが上陸をはじめました。携帯が普及していない当時、私は屋上から1階の事務室までダッシュし照屋さんに電話し、駆けつけた照屋さんと共に初産卵を無事に撮影することができました。

照屋さんが支援する海辺小学校へ同行したこともあります。児童が一人1～2頭、ウミガメを1年間飼育し、夏休みなどには自宅で世話をしているの

です。ある日の児童の飼育日誌にはエサの欄に「かっぱえびせん」と書いてあったりします。照屋さんはニコニコしながら見えています。ダメ出しもしません。「ウミガメにとっても法的にも問題は無いんですかね」などと、つまらないことを言う私に対し、「この地域はウミガメに学校の存続を託しているわけさー」と言います。確かに、保護者がグラウンドを掘って学校前の海からパイプを通し、海水が出る蛇口を設置するなど、取り組みに熱意が感じられました。残念ながらウミガメ活動も里子募集の切り札とはならず、その小学校は廃校となってしまいました。照屋さんは割と適当で、いかにも「沖縄の人」というのんびりした感じで、沖縄中のマリンタートルから慕われています。ウミガメの甲羅に発信機を付けた時は、「ウミガメはバックしないから土のうで前だけ抑えればいいさー」との指示に従って、カメに逃げられたこともあり。あるウミガメ会議の夜には「沖縄から参加しているメンバーを集めろ！この機会に沖縄懇親会をするぞ」と沖縄からの参加者を集め、いざ宴が始まるという時に、携帯が鳴り「俺、理事会があるらしい」と居なくなりました。去り際に、「沖縄に戻って必ずやろう」と発した結果、沖縄で亀関係者の宴会が催されるようになりました。照屋さんは現在も盛大に続いている沖縄亀宴会の創始者であるという偉大な方なのです。



写真左が照屋秀司さん

静岡県伊東市のウミガメの墓

藤井 弘章

伊豆半島東海岸の北部にもウミガメの墓が集中する地域があります。具体的に言えば、静岡県伊東市の川奈と新井という地区になります。このあたりは、ウミガメの産卵できる砂浜は少ないようですが、漁民たちはウミガメに酒を飲ませて放したり、死んだウミガメを供養したりしてきました。とくに、川奈のウミガメの墓は、現在も埋葬と供養を続けているため、全国的にみても貴重な事例といえます。

伊東市の川奈は、江戸時代から漁業が盛んな地域で、ボラ・カツオ・マグロ・カツオなどを捕っていました。とくに、イルカの追い込み漁は有名でした。川奈の湾の入り口（南岸）に夷子神社があります。

神社の隣に造船場があり、その横にウミガメを埋葬する場所があります。この場所は、かつては磯伝いに歩かなければ行けないところであったといい、現在でも細い道路の行き止まりとなっています。通常は地元の人も行くところではないのですが、夏場には海水浴客が訪れます。海水浴客が遊んでいるすぐ近くに、ウミガメの墓があるので



写真1 川奈のウミガメの墓
(2013年8月撮影)

私はこの場所に1998年6月と2013年8月の2度訪れました。この墓を祀ってきたのは、川奈の漁師・杉本藤五郎さん（大正6年生まれ）で、現在は息子の正仁さん（昭和22年生まれ）がウミガメの埋葬・供養を受け継いでいます。藤五郎さんの父親が定置網を始め、藤五郎さん、正仁さんともに定置網をおこなってきました。この定置網にウミガメが入るのです。正仁さんによると、定置網は1年中おこなっており、時期に関係なく、年に5、6頭はウミガメが入るといいます。藤五郎さんはウミガメのことを「龍宮さん」と呼んでいました。藤五郎さん、正仁さん親子は、ウミガメが生きていれば、酒を飲ませて海に放してきました。とくに、藤五郎さんは、「お使いご苦労様でございます。海上安全、大漁満足」などといってウミガメを放しました。そうすると3日間ぐらいの間に必ずお礼、つまり特別な漁がくるとい

います。藤五郎さんが若いころには、ウミガメの甲羅に「海上安全、大漁満足」と墨で書いて放していたそうです。正仁さんも、ウミガメを放したり、埋めると、1週間から10日ぐらいの間に漁があるとい

います。ウミガメが網に入って死んでいた場合は、持ち帰って埋葬して供養してきました。藤五郎さんがウミガメを供養した最初は昭和9年（1934）であったとい

います。当時、捕った魚は船で伊東の市場まで運んでいました。途中、大きなカメが流れているのを見つけ、持ち帰って埋葬し、木の柱を建てたとい



写真2 墓に散乱するウミガメの骨
(2013年8月撮影)

伊東市新井にもウミガメの墓が複数あります。新井も川奈と同様、江戸時代からイルカ・ボラ・カツオ・マグロ・サンマなどを捕ってきた地域です。新井の東端にあたる海岸には昭和7年(1932)に建てられたウミガメの墓があります。カメ形の自然石の上に「大漁亀」と刻まれた自然石が載っています。この墓は、ボウケ(棒受)網をしていた蛭子丸の船元が作ったということが分かりました。蛭子丸の船元の息子に当たる石井英雄さん(昭和2年生まれ)によると、父親が漁をしていたときに、カメを供養したものであるといいます。乗組員の幹部の奥さんたちは、毎月10日に、安全と漁を祈願して、新井のリュウゴンサン、新井神社、弁天さんに参りました。蛭子丸の場合は、このときにカメの墓にもお参りしていました。蛭子丸をやめてからも、石井さんは手を合わせたり、あげものをあげたりしていたといいます、今は祀っていません。



写真3 新井(蛭子丸)のウミガメの墓
(2013年8月撮影)

ところで、ボウケ網とは敷網の一種であり、海面に突き出した棒から網を張り出して、集魚灯で集めた魚をすくい取るという漁法であり、石井さんによるとカメが入ることはあまりないといいます。ところが、ほかの人たちがやっていた定置網にはときどきウミガメがかかりました。石井さんはが子どものとき、定置網にかかったウミガメに酒を飲ませて放す光景を見たことがあるといいます。

このほか、新井の弘誓寺(曹洞宗)にもウミガメの墓があります。中野音次郎が明治43年(1910)に建てた「亀墓地供養塔」と刻まれた墓石があるのです。私が見つけた範囲では、伊東市では最古の墓になります。1998年の調査では墓石を見かけたのですが、2013年の調査では見つかりませんでした。ただし、中野音次郎の孫にあたる中野みちこさん(昭和15年生まれ)には、話を聞くことができました。音次郎はボウケ船に乗っていて、網元ではなかったといいます。あるとき、死んだカメを拾ってきて、石塔を建てて祀りました。船が入るたびにカツオなどをあげたといいます。魚をあげると必ず漁があったので、「漁亀」だ、といていたといいます。この墓も、中

野さんの家族以外は参らなかったようです。



写真4 新井・弘誓寺のウミガメの墓
(1998年6月撮影)

このほか、新井の西町不動には、昭和15年(1940)に建てられたカメの墓があります。伊東市玖須美の龍宮神社には、昭和30年(1955)ごろに、カメを埋めた祠があります。伊東市松原の海津見神社にもウミガメを祀った祠があります。

伊東市のウミガメの墓は、おそらく、江戸時代か明治時代のころから、ウミガメを祀ると大漁になるということがいわれはじめ、信仰熱心な漁民がウミガメを埋葬して供養をするようになったと思われます。漁民の間には、たとえば、ウミガメを祀ると漁をさせてくれるという中野さんの話などが口伝で広まり、ウミガメを埋葬して供養することがときどきおこなわれてきたのだと思います。

前号では、静岡県御前崎市のカメ塚について取り上げました。その際に、御前崎では漁民が祀るカメ塚は急速になくなっていることに触れました。これは全国的な傾向のようです。ウミガメを埋葬して供養することがなくなってきたのは、ウミガメを祀っていた世代が高齢化したこと、漁業従事者が少なくなっていること、漁民の信仰が変化していること、などが要因として考えられます。また、死んだウミガメを処理する主体が、漁民ではなく、行政や調査する人々に変わっていったことも一因です。ウミガメを祀った話は、ウミガメを食べたという話と同じで、過去のこととして語られる場合が多くなっています。そんななか、代替わりをしても、ウミガメ供養を続けている漁民が伊東市にいることに驚きました。漁民とウミガメとのかかわりは今後、どのように変化していくのでしょうか。見守り続けたいと思います。

石原 孝・植月 茉莉亜

第24回日本ウミガメ会議は静岡県牧之原市で開催しました。地元のカメハメハ王国と牧之原市を中心とした第24回日本ウミガメ会議実行委員会との共催で行われました。牧之原市は隣にウミガメの町として有名な御前崎市があるものの、牧之原市でもウミガメが産卵していることを知らない人が多くいるということで、今回のウミガメ会議と出前授業を通して地元の砂浜へ理解が深まることを期待しています。

全国の調査に携わる方々が多く集まるこの会議は、産卵とその調査が（多くの場所で）一段落した11月の中旬から下旬頃に開催することが恒例となっています。今年も全国各地からのべ600名ほどの参加があり、昼間の会議だけでなく、懇親会や二次会などで夜遅くまで飲みながら語り合いました。

今年のテーマは「浸食の進む砂浜とどう向き合うか」というもので、初日には米国で現場主義を貫いてきたブレアー・ウェザリントン博士に特別講演「ウミガメの視点から見た砂浜」としてウミガメにとってどのような砂浜が必要なのか、を話してもらいました。二日目には牧之原市での最も大きな関心事でもあり、全国的な問題でもある砂浜の侵食をひとつのキーワードに、「卵の移植でウミガメは増えるのか?」と題したシンポジウムも行いました。最終日には一般講演として13題の口頭発表が行われました。一般講演としては17題のポスター発表も会議期間中を通して行われました。

また、ウミガメ協議会の亀崎は、2014年1月末までの任期をもって会長を降りることを宣言し、ウミガメ協議会のこれまでの歴史と反省について語っています。

最後に、次回となる第25回日本ウミガメ会議は鹿児島県の奄美大島で2014年11月28日（金）から30日（日）の三日間開催されます。奄美海洋生物研究会をはじめ奄美大島で活動される方々が、楽しくかつためになるウミガメ会議を目指して準備をしていきますので、是非ご参加下さい。

■会議詳細

名称 第24回日本ウミガメ会議(牧之原会議)
主催 日本ウミガメ協議会・第24回日本ウミガメ会議実行委員会
後援 牧之原市・静岡県・環境省・水産庁・国土交通省
参加者数 述べ600名(受付をされなかった地元無料参加者等は除く)
ウミガメ出前講座 11校22クラスを対象に実施

■会議の流れ

11月22日(金) 砂浜観察/開会式/特別講演「ウミガメの視点から見た砂浜」ブレアー・ウェザリントン博士(フロリダ州立魚類野生生物研究所)/座談会
11月23日(土) シンポジウム「卵の移植でウミガメは増えるのか?」/全体会議「日本のうみがめ2013」/ポスター発表・懇親会
11月24日(日) 一般講演/閉会式



牧之原会議の様子はこちらから USTREAM (<http://www.ustream.tv/recorded/40992104>など)

各地で調査・活動を行っている当会スタッフの近況をお伝えします!



黒島研究所より

黒島研究所では、夏休みや春休みになると全国から多くの学生が研修に訪れます。近年では、学芸員実習の受け入れもを行っています。当研究所は博物館類似施設で、研究で明らかになったことを一般に伝えるために常設の展示室があります。学芸員実習では、この展示室にある標本やはく製の作成、管理を学びます。去年の実習では、偶然にもイルカの漂着があり、解剖して死因を調べました。その他にも、展示物をお客様へ解説することで、人に伝える力を身につけます。そして、夜は満天の星空の下で、ウミガメの産卵調査をしています。もし、これから学芸員として働いてみたい学生がいれば、いつでもご連絡下さい。

★学芸員実習を随時受け入れ中!!★

活動の様子はこちらから→HP <http://www.kuroshima.org/>

お問い合わせはこちら→TEL 0980-85-4341



室戸基地より

室戸基地に赴任して3年目に入った、骨格標本作りが大好きな渡辺と夜の磯採取が大好きな河野です。漁師さんや地域の方に支えてもらいながら日々生活を送り、夜は一緒にお酒を飲みながら人生相談にもなっています。室戸は第二の故郷となりました。

室戸基地では定置網にて捕獲されたウミガメの調査を行い、標識放流を中心に活動しています。写真はウミガメを計測している様子です。2013年度には212頭のウミガメを調査しました。カメの中で最も大きなオサガメが3頭も確認できました。ウミガメ以外にもリュウグノツカイをはじめとする希少種も定置網に入っており、生物の記録も取っています。毎日違う生き物に出会うことができ、今年はどんな生物達に出会えるのか調査が楽しみです。(河野)

漁師のNPOと一緒に活動しています→HP <http://homepage2.nifty.com/ryoushi-no-npo/>

お問い合わせはこちら→TEL 0887-22-1685



奄美大島より

ウミガメの事務局を出て現場に戻り早 3 年が立ちました。今年もウミガメのシーズンが始まり、あちこちの浜に出向いて足跡の調査を行っている日々です。皆さんの所はいかがですか。

さて、ここで連絡とお願いがあります!今年の日本ウミガメ会議は、なんと奄美大島で行われます!日本ウミガメ会議実行委員会が立ち上がり、会員でもある興克樹

実行委員長のもと、植月事務局長、松沢新会長と開催にむけて準備を進めています。奄美はウミガメはもちろん、山から海まで希少な野生動物やサンゴなど見所満載です!さらに日本でここだけのオサガメが産卵した浜もありますよ!今年の会議も皆さんお誘いの上、ぜひご参加ください!写真は与路島の自然海浜「アシニ」奄美にはこんな浜がまだいっぱい残っています!

奄美海洋生物研究会

活動の様子はこちらから→HP <http://amosg.exblog.jp/>



三重県紀宝町

「紀宝町ウミガメ公園」より

紀宝町ウミガメ公園では主にウミガメや魚の飼育に加え、御浜町七里御浜海岸にて産卵・孵化調査、漂着個体調査を行っています。昨年はアカウミガメの産卵が9回確認されました。これはここ5年間で最も少ない数字です。最近カツオの不漁に漁師さんが嘆いているようにどうやら本州や四国沿岸の海水温が低いようですが、

今年の産卵はどうなるでしょうか。また、私がここに赴任してから一度も漂着が確認されていません。もちろん死んでしまうウミガメがないのはいいことなのかもしれませんが、それだけ沿岸にやってきているウミガメが少ないという可能性もあります。今年もまもなく産卵シーズンが始まりますので、しっかり浜を歩きたいと思います。

活動の様子はこちらから→HP <http://www.town.kiho.mie.jp/umigame/>

お問い合わせはこちら→TEL 0735-32-368

両前肢の一部を失ったアカウミガメの悠ちゃんに人工ヒレを! 悠ちゃんプロジェクト 人工ヒレ完成報告

2008年に紀伊水道で1頭のアカウミガメが捕獲されました。そのアカウミガメは両前肢をサメに食いちぎられて、うまく泳ぐことができませんでした。そのスピードは、健常のカメのたった60%ほど。このウミガメをみたある少年が「このまま海に帰したらまたサメに食べられてしまう」と大人たちに訴えたことがきっかけとなり、ウミガメがうまく泳げるよう人工ヒレをつけてあげようと、義肢の専門家、水着の専門家、生物の専門家、行動記録の専門家、運動工学の専門家など、様々な専門家が集まりました。そうして始まった悠ちゃんプロジェクトですが、2014年4月5日に悠ちゃんがうまく泳げる人工ヒレが完成し、終焉をむかえました。プロジェクトが発足した2010年から試行錯誤を繰り返し、作られた人工ヒレは36種類。人工ヒレを直接前肢にしばりつけたことで血行が悪くなり、傷口を壊死させてしまったこともありました。紆余曲折の末、悠ちゃんがうまく使いこなしたのは、人工ヒレの先端に人間用のフィンをつけたものでした。本気で泳げば健常のカメよりも早く、また一緒に泳いだダイバーが悠ちゃんを見失ってしまうほど、早く泳げるようになりました。近年、人間の技術は人工的に細胞をつくりあげるまでに発達してきました。しかし、長い年月を経てウミガメにとって最適な形に変化してきたヒレを、人間の技術によって再現することは非常に難しく、同時に、生物の形の完璧さを改めて認識したのでした。人工ヒレは完成したかもしれませんが、私たちの挑戦はまだまだ続くかもしれません。5年にわたって悠ちゃんプロジェクトを応援して下さった皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございます。今後、悠ちゃんは夏は神戸空港島西緑地の人工海水池で、冬は須磨海浜水族園で過ごします。

●写真と年表で振り返る悠ちゃんプロジェクト5年間のあゆみ

2008年6月25日	紀伊水道で漁業定置網に迷入し、混獲された。サメに両前肢を食われてしまっていた。	写真1
2009年1月14日	「悠」と命名。悠ちゃんプロジェクト発足。	
2009年3月2日	第1回人工ヒレ開発プロジェクト会議。川村義肢本社にて、ヒレの型取りを行った(4/5)。内視鏡を使って生殖腺を直接観察したところ、メスであることがわかった。	写真2
2009年6月20日	第1モデル人工ヒレ装着試験	写真3
2009年9月10日	流水水槽で悠ちゃんの運動機能を測定(神戸大学海事学部にて)	
2009年9月12日	第5モデル人工ヒレ装着試験(神戸空港人工海水池にて)。33日間の長期装着に成功!!	写真4
2009年10月14日	人工ヒレ取り外し。人工ヒレ装着の際に前肢を締め付けたこと、海水温が低下したことで両前肢の傷が悪化し、壊死してしまった。	写真5
<p>水温低下→体温低下→心拍低下→運動低下→血流低下→酸素不足→壊死 装着方法の再考。腕を締めつけずに人工ヒレを固定する方法は?? 人工ヒレを甲羅からぶら下げる「懸垂型」装着法で再チャレンジ</p>		
2010年6月20日	第6モデル人工ヒレ装着試験。	写真6
2010年9月11日	第7モデル人工ヒレ装着試験。つぎはぎのジャケット 装着・脱落・補正の繰り返し	写真7
2011年5月27日	第10モデル人工ヒレ装着試験。形になってきた懸垂型人工ヒレ。	写真8
2011年9月18日	第14モデル人工ヒレ装着試験。14日間の装着に成功。	写真9
2012年4月17日	野生のオスのアカウミガメとのお見合い。2回の交尾を確認した。	写真10
2012年5月19日	第23モデル人工ヒレ装着試験。イカのヒレのような形のヒレを考案。	写真11
2012年11月4日	第26モデル人工ヒレ装着試験。23日間の装着に成功。	写真12
2013年3月20日	第28モデル人工ヒレ装着試験。人間用のフィンを使用した人工ヒレ。	写真13
2013年5月15日	水着のプロ、山本化学工業㈱がプロジェクトに参加。ジャケットを専門に製作いただく。	
2013年6月5日	山本化学工業製のジャケット試着	写真14
2013年8月17日	第32モデル人工ヒレ装着試験。ヒレの構造も最終検討し、ウミガメの前肢の骨の形を模した板をカバーで被い、装着した。	写真15
2013年10月13日	第34モデル人工ヒレ装着試験。やっぱり人間用のフィンはすごかった。第28モデルを参考に人工ヒレを調整し、ジャケットは立体成型した。	写真16
2013年11月7日	第35モデル人工ヒレ装着試験。人工海水池でびゅんびゅん泳ぐ様子が確認された。	写真17
2014年4月5日	悠ちゃん第36モデル人工ヒレ装着。前肢の可動域を広くし、抵抗をなくすため、ジャケットの生地を最小限にした。	写真18

写真1



写真2





悠ちゃん基金にご協力お願いします!

悠ちゃんがもっと元気に泳げるように!
引き続き「悠ちゃん基金」にご協力お願いします!

振込み口座はコチラ

池田泉州銀行 枚方北支店
(イケダセンシュウギンコウ ヒラカタキタシテン)
店番号:045 口座番号:0540977
口座名:ウミガメ義肢基金 代表者 亀崎直樹
カタカナ:ウミガメギシキキン

ゆうちょ銀行
口座番号:00900-1-170710
ウミガメ義肢基金 カタカナ:ウミガメギシキキン

◆濱田 暁聖



はじめまして濱田暁聖（ハマダアキト）と申します。4月からウミガメ協議会の一員となり、現在は紀宝町ウミガメ公園にて飼育員として働いています。私がウミガメ協議会の存在を知ったのは、専門学校1年の時でした。その時はここで働くと思っていませんでしたが、和歌山県みなべ町での調査など、協議会の活動に関わるうちに、いつの間にか私の2年間の学生生活の思い出のほとんどがウミガメに関するものになっていました。学生の間、みなべのほか黒島、室戸にも足を運んで研修を受け、調査方法からマナーに至るまで指導していただきました。学生から社会人へと立場は変わりましたが、これからも学ぶ気持ちを忘れず、日々頑張りたいと思います。

◆田中 颯

初めまして。4月より黒島研究所に赴任した田中颯（はやて）と申します。大阪動植物海洋専門学校の水生生物学科を3月に卒業後、すぐ黒島にわたり若月さん、亀田さんのもとで、日々厳しく鍛えていただいております。小さいころからウミガメが好きで近くの水族館によく通っていました。専門学校時代は、実習生として日和佐・屋久島・みなべ・黒島でお世話になりました。ウミガメと触れ合い、各地でウミガメについて学ぶことはとても楽しく、卒業後もウミガメと関わられていることが本当に幸せです。ウミガメの専門知識はまだなのですがこれからしっかりと勉強し、日本のウミガメとウミガメに関わる皆さまの活動（明るい未来）に貢献できるよう励みます。どうぞよろしくお願ひします。



インターン募集中!

就職する前に、あるいは在学中に休学する形で、当会のスタッフとして活動し、業務を学んでいただくことができます。文書の作成、フィールドワーク、データの収集管理など、日常の業務を身に付けていただけます。また、インターンシップの過程で、適職を見つけ就職されることも可能です。

ボランティア募集中!

調査に協力していただける方、HPの英語訳をしていただける方などなど、様々な場面でのボランティアを募集しております。海の近くにお住まいで何か始めたい方、長期休暇にどっぷりウミガメ調査をしたい方、自分の語学力を生かしたい方、是非ご連絡ください。

詳しくはHPまたは事務局までお問い合わせください

インターンシップ:http://www.umigame.org/J1/umigame_intern2014.html

ボランティア:http://www.umigame.org/J1/umigame_hogo_volunteer.html

事務局の主な動き（2013年1月～2013年12月未まで）

- 1月5日 加古川の本荘ケーソンでウミガメが発見される
- 1月17日 大阪府泉南郡岬町に漂着したアカウミガメの調査を実施
- 2月1日～9日 国際ウミガメ学会に参加
- 2月2日 2012年度紀伊半島ウミガメ情報交換会に参加
- 2月5日 福井県東三松海岸に漂着したウミガメの調査を実施
- 2月16日 東海地区ウミガメ情報交換会開催
- 3月5日～9日 第60回日本生態学会に参加
- 4月3日 アカウミガメの産卵はじまる
- 4月21日 第1回七里御浜・王子ヶ浜一斉クリーン作戦開催
- 4月24日～25日 日本海ウミガメ漂着ワークショップを開催
- 4月26日 ウミガメトークショーを開催
- 5月11日 平成25年度徳島県アカウミガメ上陸・産卵調査講習会を開催
- 6月14日 南あわじ市土生で混獲されたアオウミガメの調査を実施
- 6月17日 「Blue Ocean Project」 2013年のコラボTシャツ登場
- 7月7日 大阪府忠岡町大津川河口漂着アオウミガメを調査を実施
- 7月27日 三重県千代崎海岸に漂着したオサガメの調査を実施
- 8月17日 神戸空港島人工海水池にて生き物観察会を実施
- 8月4日 淡路市・洲本市の海岸に漂着したアカウミガメの調査を実施
- 9月7日 みなべ町千里浜で孵化率調査を実施
- 11月25日 日和佐大浜を視察し光環境の改善について関係者と協議
- 11月28日 淡路島で漂着調査を実施



平成24年度 特定非営利活動事業収支計算書

特定非営利活動法人 日本ウミガメ協議会

自：平成24年10月1日 至：平成25年9月30日

(単位：円)

科目		金額	
I 収入の部			
1会費収入		1,681,114	
			1,681,114
2事業収入			
(1) ウミガメ類を取り巻く自然環境の保全に関わる事業			
助成金・事業委託費・事業収入		31,858,154	
小計			31,858,154
(2) ウミガメ研究・保護活動の発展および育成に関する事業			
助成金・事業委託費・事業収入		6,772,580	
小計			6,772,580
(3) 日本ウミガメ会議の開催に関する事業			
会議開催協賛金		5,627,602	
小計			5,627,602
3寄付金収入	寄付金	3,831,885	
			3,831,885
4雑収入	受取利息	1,460	
			1,460
5その他の収入		10,223,808	
			10,223,808
収入の部合計			59,996,603
II 支出の部			
1事業費			
(1) ウミガメ類を取り巻く自然環境の保全に関わる事業			
事業費		13,118,347	
人件費		17,121,168	
			30,239,515
(2) ウミガメ研究・保護活動の発展および育成に関する事業			
黒島研究所運営費 (事業費)		4,339,175	
人件費		5,230,000	
			9,569,175
(3) 日本ウミガメ会議の開催に関する事業			
事業費		2,330,650	
			2,330,650
(4) 会員および関係団体との相互連絡と情報の収集および提供に関する事業			
うみがめ速報の配信、機関誌の作成・配布		198,645	
			198,645
(5) 情報誌の作成に関する事業			
うみがめニュースレターの発行支援		0	
			0
2管理費			
人件費		4,158,738	
その他管理費		21,566,401	
小計			25,725,139
支出の部合計			68,063,124
当期収支差額			△ 8,066,521
前期繰越収支差額			9,725,151
次期繰越収支差額			1,658,630

阿久津淳子 池村茂 井上尚志 岩本貴美子 ウドウミズエ 太田尚子 太田英利 大牟田一美 奥田恭子
 蔭山純由 金井澄 亀井陽太郎 河端嶺 河端玲 北村紀子 北村ひろみ 九埜勝家 朽見健一郎 後藤清
 小林茂夫 近藤康男 斎藤敏郎 斎藤充 佐藤祐一 清水紀代美 添田麗子 田辺佐敏 玉岡昇治
 塚田津恵子 辻紹子 照屋秀司 内藤真由美 中里見猛 西島宏樹 長谷川久美子 畠山香菜 波多野真樹
 原田幸子 福田瑠美 藤田美智代 ペイン留美 前田直美 松平和子 松本亜芸子 山田輝一 米田耕作
 綿貫慧 原田幸子 今井裕行 船津桂子 中本真理子 渡辺童心 内藤真由美 あさひリビング
 シャディ(株) (株)エニシル ギフコ(株) ライオン株式会社 丸吉日新堂印刷株式会社 カロラータ(株)
 豊島(株) ビーチアン (株)みや (株)ネットラスト (有)カイセンドンヤClickAid+マチウケル! ヤフー(株)
 (一財)ジャスト・ギビング・ジャパン NPO法人パブリックリソースセンター アマゾンジャパン(株)
 エコポイント事務局 八丈島民芸あき みなペロイヤル 南知多ビーチランド みなべ治勝会
 みなべ町教育委員会 串本海中センター

当会展出イベント(第24回日本ウミガメ会議、イルカコンサート、エコプロダクツ等)にてご寄付をくださった皆様、たくさんのご支援をありがとうございました。

(順不同・敬称略)

うみがめニュースレターのご案内

うみがめニュースレター(以下U N L)という雑誌をご存じでしょうか?U N Lはウミガメにまつわることを分野に関係なく集めた総合情報誌で、よりディープなウミガメの世界を垣間見ることができます。さらに、専門知識がなくても分かるように、という方針で編集されていますので、一般の学術書よりもかなり読みやすくなっています。

発行は年4回で、うみがめニュースレター編集委員会が行っており、日本ウミガメ協議会ではこれを支援しています。バックナンバーは日本ウミガメ協議会のHP(http://www.umigame.org/J1/katsudou_newsletter.html)からすべてご覧いただけます。また、ウミガメ速報をメールで受信されているSTSメンバーを対象に、今後は最新号のダウンロードURLをメールでもご案内していく予定です。

しかしながら財政状況は厳しく、発行を継続していくため、皆様からの温かいご寄付をお待ちしております。また、切手の寄付も大歓迎ですし、協賛広告も併せて募集中です。詳細はメールで newsletter@umigame.org までお問い合わせ下さい。

Seaturtle goods shop 新商品! うみがめの世界 手拭い☆



当会スタッフがデザインしたオリジナル手ぬぐいできました。手ぬぐいにはアカウミガメを中心とした海の生き物たちが描かれています。流れ出る汗をぬぐうのもよし、ちょっとしたウミガメの説明に使うもよし、夏のお供にはおすすめの一品です。

■864円 ■色 白地×紺 ■解説付き

インターネットでお買い物

うみがめグッズがインターネットショップからご購入いただけます。オリジナルグッズのご購入はもちろん、会費のお支払いやご寄付にもご利用いただけます。お支払いは代引き、各種クレジット、ネットバンキング、当会イーバンク口座等からお選びいただけます。

アクセスはこちら!

<http://seaturtle.shop-pro.jp>

◆ STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートして下さるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで、自然が好きな方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非入会をお誘い下さい。

入会金:なし
年会費:個人会員3,000円、学生会員1,000円
団体会員10,000円、特別会員100,000円
会員特典:オリジナル会員証&グッズ、機関誌

seaturtle goods shopからもご入会いただけます。詳細は下記サイトへアクセスしてください。
<http://seaturtle.shop-pro.jp>



◆ STSmembers更新手続きについて

会員更新の書類は会員期限終了月に送付させていただきます。会員の皆様のご支援で、ウミガメやそれを取り巻く環境を保全してゆくことができます。更新月を迎えられる会員の皆様は、是非とも更新して頂ければ幸いです。今後とも当会をよろしくお願い致します。なお、すでにご登録いただいている内容に変更がございましたら当会までご一報ください。

編 集 後 記

2013年はアメリカのボルティモアで開催された国際ウミガメ学会への参加にはじまり、紀伊半島ウミガメ情報交換会や東海地区ウミガメ情報交換会への出席、そして第24回日本ウミガメ会議(牧之原会議)の開催等、協議会にとって本当に充実した一年になりました。悠ちゃん義肢プロジェクトも5年が経過し、人間用のフィンを参考に作られた人工ヒレを改良し、ジャケットは立体成型へと進化し、一通りの区切りを迎えました。また「Blue Ocean Project」のコラボTシャツが登場、イルカさんのコンサートやウミガメ・エコツーリズム、エコプロダクツへの出展等、様々なイベントで温かいご支援をいただき感謝しております。2014年もウミガメの調査・研究、イベント出展等、ますます活動の場を広げていきますので、よろしくお願いいたします。

デザイン担当:宮原尚子

マリンタートラー(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2014年7月31日
発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

電話:072-864-0335 Fax:072-864-0535

URL <http://www.umigame.org> E-mail info@umigame.org

